

<今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙 I 1 章 18～25 節 >
聖書全体の中でも魅力的な個所の一つ、I コリント書 1 章の後半に入ります。

①なぜ急に「十字架の言葉」(18)なのか? その前の箇所との関係から

今日の箇所は、「十字架の言葉は、滅んで行く者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です」(18)という印象的な言葉で始まります。突然「十字架」が出て来るような気がしますが、そうではありません。「パウロがあなただけのために十字架につけられたのですか」(13)、「キリストの十字架がむなしなものになってしまわぬように」(17)で、すでに出て来ています。コリントの教会の人たちが分裂し、一つになれない状態になっていることを聞いた時にパウロが思い巡らしたこと、それがイエス・キリストの十字架の死の出来事であり、その主イエスの姿との違いだったのです。

②世界の見方を一変させる神の啓示 十字架にかけられて死ぬ救い主!

「十字架の言葉」とは何を言っているのでしょうか? 「神様がこの世界を救うために独り子をこの世で最も恥ずべき十字架の死につけて下さった」ということを言っているのです。それは、私たちが普通「力ある神が自らを現された!」と思うのとは全く違う、力を誇示せず自らを徹底して低くし給う、驚くべき啓示の仕方だったのです。ある注解者がこう述べています、「この驚くべき出来事が神の特質の最も深い真理の啓示であるならば、私たちの世界観は完全に逆転する。すべては十字架の光の下で、再評価されなければならぬ。…この箇所の逆説的論理を把握するすべての人は、二度と世界を同じように見ることはできない」と。教会とは、その様な者たちから成る終末的な群れ(低く、謙遜であることを主から学び、その様に共に生きる群れ)なのです!

③ユダヤ人もギリシア人もない、この主を受け入れた者たちからなる教会!

したがって、この主イエスを頭とする教会にはユダヤ人もギリシア人もないのです(24)。身分の違い、人種の違い、男女の違いもないのです。神様が、この救い主なる御子の十字架の死によってすべての人を招いて下さった救いの招きを受け入れるか受け入れないか、その違いがあるだけなのです。受け入れた者は皆、信仰の父祖、アブラハムの子孫なのだと言っています(ガラテヤ 3:26-29)。私たちがこの群れの中で「誰が正しく、何が正しい」といったことに固執しているならば、その時は前の世界、すなわち自分の知恵を誇ろうとする世界の姿に逆戻りしているのです。しかし、もうそんな姿を取る必要はないのです!